

【研究ノート】

「使える英語」が身につく英語授業のイメージ

—高校英語授業に関する予備調査結果から—

A Pilot Study on High School English Classes for the Acquisition of Communication Abilities

杉田 由仁 (明治学院大学)

Abstract

This research note describes experimental results to extract features of students' learning activities through English classes at high school. The primary purpose is to show factors that influence on their awareness of inability to speak in English. A questionnaire was issued to 48 Japanese university students and the collected data was analyzed by using a decision tree. The results indicated that (a) the most influential factor was listening activities, (b) writing activities and grammar learning were also recognized as influential factors, and (c) teachers' English use in class was not extracted as the factor. Based on the results, the image of communicative English class was presented.

Keywords: high school, English class, communication abilities, speaking

1. はじめに

平成 25 年度より全面実施となった『高等学校学習指導要領』(文部科学省, 2010) においては, 4 技能(「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」)の総合的な指導を通して, 2 つ以上の技能を組み合わせる統合的に活用できる「コミュニケーション能力」の育成が重視されている。「授業は英語で行うことを基本とする」ことが明記され, 生徒が英語に触れる機会を充実させ, 授業を実際のコミュニケーション場面とすることが求められている。これまでの「英語の文法や語彙の知識を教える」ことを中心とした高校の英語授業から, 「生徒が英語に触れ, 英語を使いながら, 思考・判断・表現力を高めるための言語活動」を中心とした授業への転換が強く打ち出される内容となっている。

前回(中学校:平成 10 年 12 月, 高校:平成 11 年 3 月)の改訂では, 実践的コミュニケーション能力の育成が重視され, 特に『中学校学習指導要領』(文部科学省, 1999)では, 従前の「全体として 4 技能のバランスを取る指導」から, 「聞くこと」と「話すこと」に重点化した指導への転換が求められた。これを受けて高等学校では, 中学校英語との接続科目となる「英語 I」の取り扱いとして「中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ, 聞くこと及び話すことの活動を多く取り入れながら, 読むことおよび書くことを含めた四つの領域の言語活動を総合的, 有機的に関連させて指導すること(文部科学省, 2000)が明記された。

今回の調査対象となった2・3年次生(平成25・26年度入学生)は、平成10・11年度版指導要領に基づく中・高6年間の英語教育を受けてきた学生たちであり、中学校時代には「聞くこと」「話すこと」に重点化された授業で、高校時代には「聞くこと」「話すこと」を多く取り入れた授業で英語を学ぶ機会が与えられてきた。このような実践的コミュニケーション能力の育成を重視した指導要領の性格と構成を勘案すると、その教育効果としては、「読むこと」「書くこと」よりも、「聞くこと」「話すこと」の技能習得が促進されると考えられる。しかし、初回授業時に英文学科生48名を対象として実施した「高校時代の英語授業に関するアンケート」において「最も不足している技能」について自己評価を依頼したところ、37名(77.1%)が「話すこと」と回答した。これに「聞くこと」と回答した5名を加えると、実に全体の87.5%を占める学生たちが、中学校・高校時代には指導重点とされていた技能の不足を感じている実態が浮かび上がってきた。

今回の改訂では、「情報や考えなどを的確に理解し、適切に伝えることのできるコミュニケーション能力」という、これまで以上に高いレベルの伝達能力を養っていくこと(文部科学省,2010)が求められている。このような目標達成に向けて、旧指導要領において指導重点化されていたにもかかわらず、「話すこと」の技能促進が十分に図られなかった原因・理由を明らかにしておくことは、これからの教室における指導内容・方法の改善を行う上で参考になると思われる。そこで、原因究明を行うための予備調査として今回のアンケート結果の分析を行い、対象学生たちが実際に教室で受けてきた授業内容・方法のパターンを分類して、使える英語の基盤となるコミュニケーション能力が身につく英語授業のイメージ描出を試みることにした。

2. 調査方法

2.1 対象者

今回の調査対象者は、首都圏の私立大学英文学科に在籍する大学2年生および3年生48名で、入学時に実施したTOEFL ITPの学科平均得点によると、英語力のレベルはそれぞれ441.1(2年生)、433.7(3年生)であった。教職課程科目である「英語科教育研究1(3年次対象)」および「英語科教育研究3(2年次対象)」を受講している学生で、授業中に担当教員(筆者)の依頼に応じて回答した。調査開始時に口頭にて依頼し、合意を得た。

2.2 方法

調査は、2015年4月7日(火)および13日(月)の各初回授業時に、個別記入式の質問紙を配付しその場で回答する集合調査形式によって行われた。回答は個々の学生の英語学習経験を把握するために記名で依頼した。実施時間は、依頼・説明と回答を含めて15分程度であった。

2.3 内容と分析方法

本調査の質問紙を付録に示す。質問内容は表1にあるように、質問1から質問10で構成されていた。調査データの分析方法として、まず高校の英語授業全般に関わる質問1～3の多肢選択法(単一)による回答については、度数を単純集計してグラフ化を行い、回答傾向の特徴を探った。あわせて、調査の主目的である「最も不足していると感じる技能」

に対する回答状況の集計も行った。

表1 質問紙の構成

1. 高校時代の英語「好き」「嫌い」
2. 高校英語授業の重点
3. 授業における教師の英語使用状況
4. リスニングの授業内容と方法
5. スピーキングの授業内容と方法
6. リーディングの授業内容と方法
7. ライティングの授業内容と方法
8. 新出語句の授業内容と方法
9. 文法項目の授業内容と方法
10. 最も不足していると感じる技能

次に、質問項目4～9の自由回答法による記述データについては、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (grounded theory approach: GTA) による言語データ分類手法の1つである「オープン・コーディング (open coding)」(住, 2012) を参考にして分析を行った。具体的には、質問項目ごとの言語データを分析単位に分割する切片化を行い、切片化されたそれぞれのデータの活動目的と内容・方法に基づきラベル (コード) 付けを行った。図1に「リスニング」に関する言語データの分析過程の一例を示す。

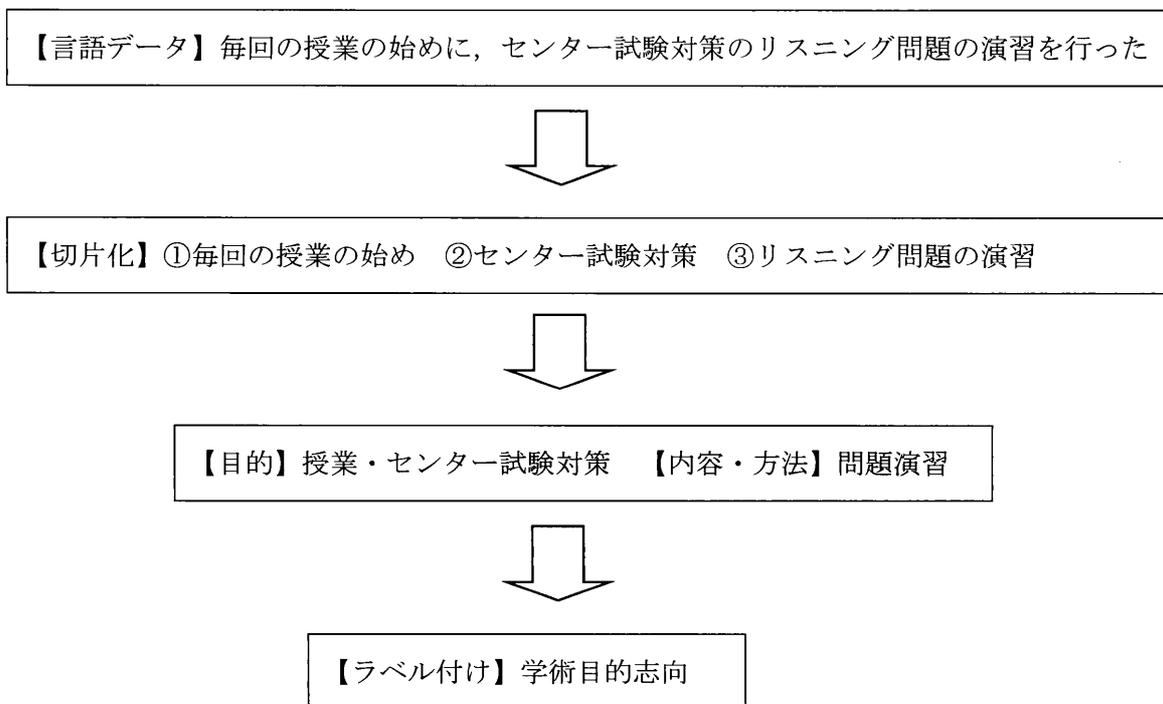


図1 言語データの分析過程

上記の方法により、筆者自身が質問項目ごとに記述された言語データのラベル付けを行ったところ、大学入試等の受験に必要な学力の基盤となる言語知識の習得を志向する「学術目的志向 (Academic purpose-oriented: A)」の授業活動と使える英語の基盤となるコミュニケーション能力の習得を志向する「コミュニケーション目的志向 (Communicative purpose-oriented: C)」活動に分類された (表 2)。

表 2 質問 4～9 の授業内容・方法の分類

	学術目的志向 (A)	コミュニケーション目的志向 (C)
リスニング	リスニング試験等の問題演習 (12) 教科書 CD の聴取 (8)	英語の歌 (8) ディクテーション (7) A L T ¹ (6) シャドウイング ² (6) リンキング等の音声解説 (1)
スピーキング	教科書音読 (7)	ペアワーク (7) A L T ¹ (5) スピーチ (4) シャドウイング ² (3) プレゼンテーション (3) ディスカッション (2)
リーディング	日本語訳 (17) 入試過去問題演習 (3) 英文解釈 ³ (1)	読解 ³ (16) 速読 (5) 音読練習 (3)
ライティング	和文英訳 (16) 文法説明 (6) 入試対策 (1) 例文暗記 (1)	英作文 (8) 5 文作文 (3) 意見文 (2) エッセイ (2) スピーチ原稿 (1)
語彙	単語集 (21) 教科書新出単語の予習 (11) 暗記 (5) 単語テスト (2)	単語の発音練習 (3) 単語の意味・用法確認 (2)
文法	例文解説 (20)	説明とドリル (24)

注. () 内の数字は、該当する記述の数を表す。

分類されたデータの分析については、GTA 分析手法の主観的側面を鑑み、結果の信頼性を高めるために、質問 10「最も不足している技能」を目的変数 (従属変数)、他の 9 項目を

説明変数 (独立変数) とする「決定木分析」を採用することにした。決定木分析とは、近年マーケティングなどの分野で注目されている「データマイニング」という分析手法の1つである (野津田・高橋, 2011)。決定木は「膨大なデータからモデルを帰納的に構築し、樹木のように枝を分岐させて表現する方法」(古田, 2007, p. 212) で、これを利用することにより、調査データから従属変数とさまざまな独立変数との関係性を意味のあるパターンとして抽出することができる。さらに、従属変数や独立変数に関して、量的変数と質的変数の両方を使うことができるため今回の分析手法として最適であると判断した。分析に際しては、質問 10 と他の質問に対する回答に着目し、質問 10 の回答結果に対する影響が大きい質問項目を決定木として逐次分割し、樹木状のモデルを作成した。この方法によると、分析結果が視覚的にわかりやすい図によって表示されるので、可視化されたデータに基づいて結果の解釈を行うことにした。

3. 結果と考察

3.1 授業全般に関する回答結果

高校英語授業に対する「好き嫌い」に関する質問項目 (質問 1) に対する回答結果は図 2 に示す通りである。高校入学時より「最初から好きだった」、つまり中学校時代から好きだったと回答した学生が 48 名の内 39 名 (81%) であった。この 39 名の「最も不足する技能」に対する回答内訳は「聞くこと」が 3 名、「話すこと」が 34 名、「読むこと」が 2 名、「書くこと」が 0 名であった。また、「聞くこと」「話すこと」を中心とした中学校英語は嫌いだったが高校時代に好きになった (最初は嫌いだったが途中から好きになった) 学生 5 名に関しては、2 名が「聞くこと」の、3 名が「話すこと」の技能不足を最も感じるという回答であった。中学校英語は好きだったが高校時代に嫌いになった学生 2 名は、いずれも「話すこと」の技能不足を最も感じるという回答であった。

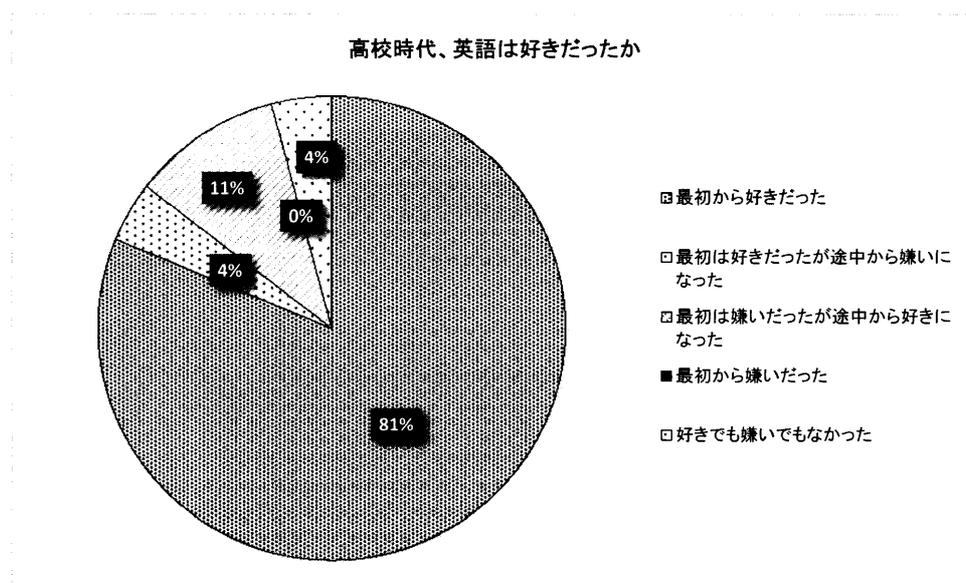


図 2 高校時代の英語「好き」「嫌い」

次に、高校英語授業ではどのような学習内容に重点が置かれていたかを尋ねた結果を図3に示す。実践的コミュニケーション能力を構成する要素として位置づけられた「概要・要点の把握」にあたる大意把握を授業の重点と受け止めていた学生は1名のみ(2%)であった。これに対して「日本語訳」については11名(23%)が授業の重点と回答した。旧指導要領に明記された「4領域の言語活動を総合的、有機的に関連させて行う指導」にあたる総合的学習を重点と感じていた学生は8名(17%)であった。半数以上(58%)の学生は文法・構文・語法といった「言語知識」の学習が高校英語の授業重点であったと回答した。また、「日本語訳」と回答した学生11名の内8名が、「文法・構文・語法」と回答した学生28名の内22名が、「総合的学習」と回答した学生8名の内6名がそれぞれ「話すこと」の技能不足を最も感じるという回答であった。

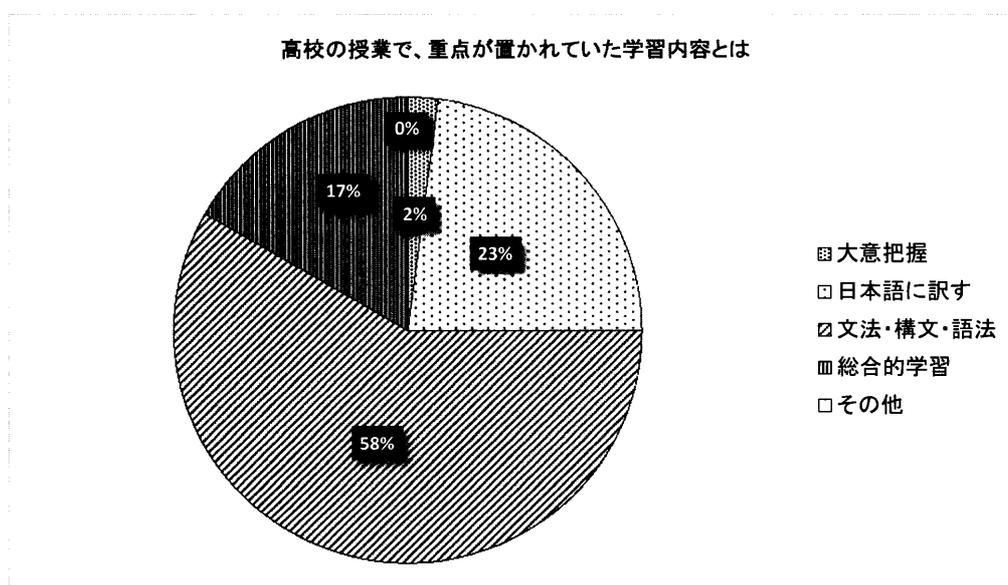


図3 高校英語授業の重点

授業中の教師の英語使用については、図4に示される状況となった。「全部英語」すなわち“All in English”で授業を進める教師はおらず、「ほとんど英語」「半分くらい英語」を合わせて8名(17%)の学生から回答があった。「ほとんど日本語」という回答が32名(67%)で目立って多く、「全部日本語」という回答も8名(17%)の学生からあった。また、最も不足する技能に関しては、「ほとんど」「半分くらい」と回答した学生8名も、「全部日本語」と回答した学生8名についても、それぞれ7名が「話すこと」という回答であった。

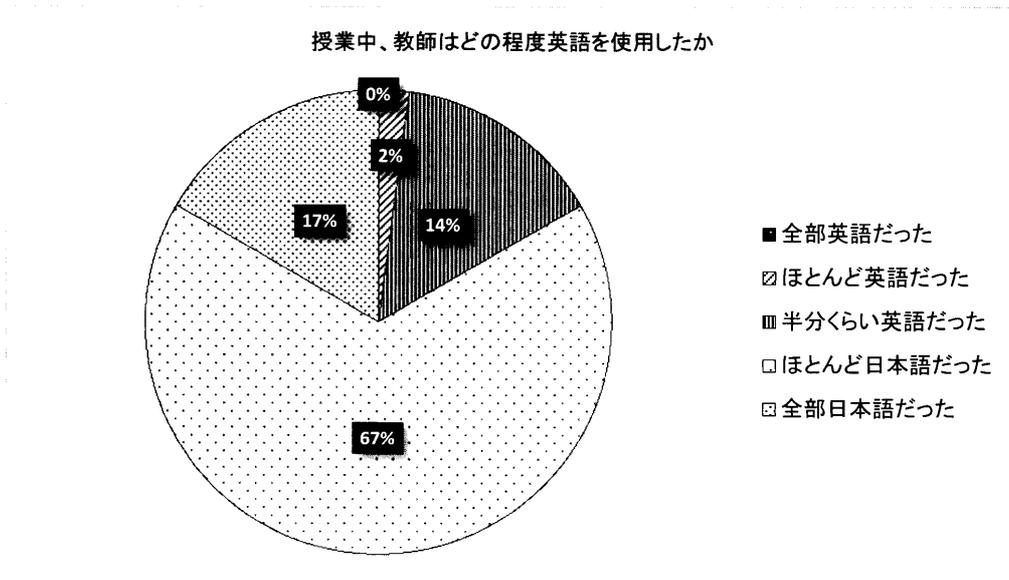


図4 授業における教師の英語使用状況

3.2 決定木による分析結果

決定木分析の結果を、図5に示す。楕円で囲まれている変数はノード (node) と呼ばれ、その中でも一番上に現れるノードを根 (root) と呼ぶ。決定木の分類は、この根から始まり、各ノードがとる値にしたがって、枝 (branch) に分岐し、最終的に四角で囲まれた葉 (leaf) に至る。こうして全サンプルを繰り返しサブグループに分割し、目的変数に大きな影響を与える説明変数が無くなると決定木はそれ以上生成されなくなる。

図5に示される通り、「話すこと」に対して「最も不足している技能と思う (=できない)」と「最も不足している技能とは思わない (=できる)」を決定づけた根ノードは「リスニング」である。大学入試センター試験対策としての「問題演習」や通常の授業における「教科書本文のCD聴取」等の学術目的志向に分類される授業活動に取り組んでいた学生 (A) 20名の内18名が話すことを「最も不足する技能」と回答した。また、第2ノードは「ライティング」であり、「和文英訳」や「文法説明」等の学術目的志向の授業活動に取り組んでいた学生 (A) 16名の内14名が話すことを「最も不足する技能」と回答した。第3ノードは「文法」で、文法知識を重視する学術目的志向の「例文解説」を受けていた学生 (A) 5名の内4名が話すことを「最も不足する技能」と回答した。これに対してドリル練習を含むコミュニケーション志向に分類された活動に取り組んでいた学生 (C) 7名については1名のみが話すことを「最も不足する技能」と回答した。

なお、本データの樹木状のモデル分割は第3ノードで止まっており、これ以上決定木が生成されないことから、「高校時代の英語『好き』『嫌い』」、「高校英語授業の指導重点」、「授業における教師の英語使用状況」や「スピーキング」「リーディング」「語彙」に関しては、目的変数である質問10「最も不足している技能」に有意な影響を与える説明変数ではなかったことも明らかになった。

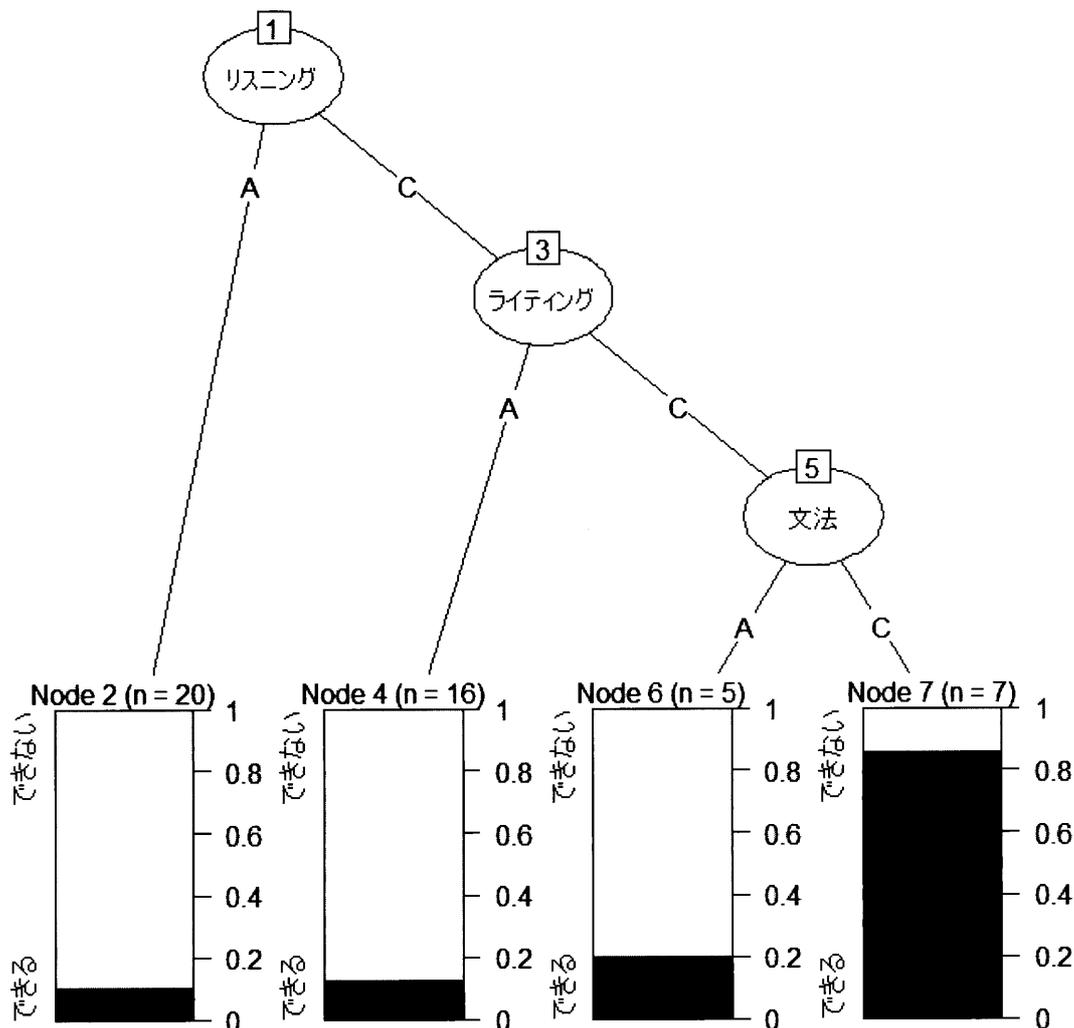


図5 決定木分析の結果

3.3 分析結果に対する考察

「話すことの技能不足」を学生たちが自覚する最大の要因が高校時代における「リスニング」の授業内容・方法であったことは非常に興味深い結果と言える。第二言語習得にはリスニングやリーディングによるインプット (input) が不可欠である。音声および文字によるインプットを処理して、効果的なタスクによりインテイク (intake) を促すことにより、スピーキングやライティングによるアウトプット (output) が可能になる (VanPatten, 1996, 2003, 2007)。リスニングが最大要因であったという今回の分析結果には、第二言語習得のメカニズムにおけるインプットの重要性との明らかな一致が見られる。また、決定木による分割の内容 (図5) を見ると「問題演習」「聴取」といった内容理解を目的としたリスニング活動に取り組んだ学生 (A) は「話すこと」を最も不足している技能と自覚しているのに対し、「ディクテーション」「シャドウイング」のような文字や音声によるアウトプットを伴うリスニング活動に取り組んだ学生 (C) は、最も不足している技能とは感じていない。

アウトプット活動をプラスすることにより、インプット処理をスピーキングなどのアウトプットに転化するための準備が整えられるというアウトプット理論 (Swain, 1985, 1995) を支持する結果と解釈することもできる。

第2の要因となった「ライティング」の指導内容・方法に関しては、学術目的志向の授業活動として分類された「和文英訳」のように言語形式に習熟するための練習に取り組んだ学生 (A) は「話すこと」を最も不足している技能と自覚しているのに対し、「英作文・エッセイ」のような自分の意図や考えを書く活動に取り組んだ学生 (C) は、最も不足している技能とは感じていない。この結果は、「英作文・エッセイ」は自分の言葉でメッセージを伝えるという実際の言語使用の場を作り出すので、目標言語習得を促進するインタラクションがより多く展開され、スピーキング能力が伸長するというライティングの効用 (Freed, Segalowitz, & Dewey, 2004) との関連も考えられる。

第3の要因となった「文法」の指導内容・方法に関しては、学術目的志向の授業活動として分類された「例文解説」によって目標となる文法項目を含んだ例文の提示と説明を受けた学生 (A) は「話すこと」を最も不足している技能と自覚しているのに対し、「説明とドリル」の両方の活動に取り組んだ学生 (C) には最も不足している技能とを感じる者が少数であることが明らかになった。Swain (1995) は、理想的なインプットを受けた学習者であっても、言語使用の十分な機会がなければ、母語話者と同等の文法的操作 (syntactic use) 能力にはつながらないと主張した。説明を受けた目標文法を、ドリルを通してアウトプットする活動が、「スピーキングにおける自動性 (fluent automatic production)」の獲得につながった可能性も考えられる。

4. まとめと本調査に向けての課題

予備調査としてアンケートの分析を行い、対象学生たちが実際に教室で受けてきた授業内容・方法のパターンを分類したところ、抽出された「使える英語の基盤となる『話すこと』の能力が身につく英語授業のイメージ」は以下の通りである。

- 1) リスニングによる十分なインプットがあり、「ディクテーション」「シャドウイング」のような文字や音声によるアウトプットを伴う活動によりインテイクを促す授業
- 2) 言語形式の練習のためだけでなく、自分の意見や考えなどをライティングにより表現する言語活動がある授業
- 3) 目標となる文法項目について理解するだけでなく、それを活用して習熟するための言語活動がある授業

また今回、決定木としては生成されなかった「教師の英語使用」については、教室におけるやり取りの約3分の2は教師の発話が占める (Chaudron, 1988) という指摘にもあるように、学習者にとって適切なレベルの英語使用が教師によって行われるならば「リスニングによるインプット」の構成要素としての位置づけが可能である。ただし、その教育的効果に関しては明確にされておらず、今後の実践を通して検証することが望まれる。

今後の本調査実施に向けての課題としては、(a) 質問項目4～9に関しては、今回の記述内容に基づいて選択肢を作成し、調査対象学生の「学術目的志向」「コミュニケーション志向」を「多肢選択法」によりデータ収集して客観性を高めること、(b) 対象となる学生数を大幅に増やして調査規模を拡大し、より決定木分析の精度を高めること、(c) 描出さ

れた授業イメージに基づき、具体的な教科書を題材として学習指導案を作成し、使える英語の基盤となるコミュニケーション能力が身につく英語授業としての妥当性について検討することなどが考えられる。

註

1. ALT に関する言語データの一例として、質問 4 (リスニング) には「ALT によるリスニング中心の授業が週に 1 度あり、授業はほぼ全て英語で行われた」また質問 5 (スピーキング) には「ALT の授業で会話をしたり、調べたことを英語で発表したりする活動があった」等の記載がある。
2. シャドウイングに関する言語データの一例として、質問 4 (リスニング) には「CD を聞き、間をおかずに繰り返す活動があった」また質問 5 (スピーキング) には「CD に続いて同じ部分を読むシャドウイングを行った」等の記載がある。
3. 英文解釈の言語データとして「一文ずつ構文を確認した。省略されている主語や代名詞の内容を明らかにした」また読解の一例として「パラグラフごとに要点を読み取るパラグラフ・リーディングを行った」等の記載がある。

引用文献

- 住政二郎 (2012) 「第 19 章 GTA 入門—言語データを質的に分析するには—」竹内理・水本篤 (編著) 『外国語教育研究ハンドブック』285-306 頁 東京: 松柏社
- 野津田雄太・高橋健一 (2011) 「決定木を用いた学生の文理選択に関するアンケートからの知識獲得」『電子情報通信学会技術研究報告』, 第 111 集, 7-12.
- 古田和久 (2007) 「教育費支出の動機構造の解明に向けて—教育意識の決定木分析—」『教育社会学研究』, 第 80 集, 207-225.
- 文部科学省 (1999) 『中学校学習指導要領 (平成 10 年 12 月) 解説—外国語編—』東京: 東京書籍
- 文部科学省 (2000) 『高等学校学習指導要領 (平成 11 年 3 月) 解説—外国語編・英語編—』東京: 東京書籍
- 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領 (平成 22 年 5 月) 解説—外国語編・英語編—』東京: 開隆堂
- Chaudron, C. (1988). *Second language classroom: Research on teaching and learning*. Cambridge University Press.
- Freed, B. F., Segalowitz, N., & Dewey, D. P. (2004). Context of learning and second language fluency in French: Comparing regular classroom, study abroad, and intensive domestic immersion programs. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 275-301.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Cambridge, MA: Newbury House.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidlhofer (Eds.), *Principles and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson* (pp. 125-144). Oxford University Press.

- VanPatten, B. (1996). *Input processing and grammar instruction: Theory and research*. Norwood, NJ: Ablex.
- VanPatten, B. (2003). *From input to output: A teacher's guide to second language acquisition*. Boston, MA: McGraw-Hill.
- VanPatten, B. (2007). Input processing in adult second language acquisition. In B. VanPatten & I. Williams (Eds.), *Theories in second language acquisition* (pp. 115-135). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

付録

高校時代の英語授業に関するアンケート

学籍番号： _____ 氏名： _____

「英語科教育研究」の参考資料にさせていただきますので、高校時代の英語授業に関する下記の質問に答えてください。成績評価等には無関係ですので、自分の経験に基づいて回答してください。

- 質問1 高校時代、英語は好きでしたか。
- a 最初から好きだった
 - b 最初は好きだったが途中から嫌いになった
 - c 最初は嫌いだったが途中から好きになった
 - d 最初から嫌いだった
 - e 好きでも嫌いでもなかった
- 質問2 高校の授業では、次のどの学習内容に最も重点が置かれていましたか。
- a 大意把握
 - b 日本語に訳す
 - c 文法・構文・語法
 - d 総合的学習(聞く、話す、読む、書く)
 - e その他
- 質問3 高校の授業で、日本人の先生はどのくらい英語を使いましたか。
- a 全部英語だった
 - b ほとんど英語だった
 - c 半分くらい英語だった
 - d ほとんど日本語だった
 - e 全部日本語だった
- 質問4 高校の授業で、リスニング能力の向上を目的として、授業中どのような活動を行いましたか。具体的な活動内容を思い出して書いてください。

質問5 高校の授業で、スピーキング能力の向上を目的として、授業中どのような活動を行いましたか。具体的な活動内容を思い出して書いてください。

質問6 高校の授業で、リーディング能力の向上を目的として、授業中どのような活動を行いましたか。具体的な活動内容を思い出して書いてください。

質問7 高校の授業で、ライティング能力の向上を目的として、授業中どのような活動を行いましたか。具体的な活動内容を思い出して書いてください。

質問8 高校の授業で、教科書の新出語句について、授業中どのような指導がありましたか。また、単語力を伸ばすためにどのような取り組み（授業外も含む）を行いましたか。具体的な指導や取り組み内容を思い出して書いてください。

質問9 高校の授業で、教科書の新出文法項目について、授業中どのような指導がありましたか。具体的な指導や説明の手順を思い出して書いてください。

質問10 あなた自身の、現在の英語力について、次のどの技能が最も不足していると感じますか。

- a 聞くこと
- b 話すこと
- c 読むこと
- d 書くこと

ご協力ありがとうございました。